



Tokyo Gakugei University Repository

東京学芸大学リポジトリ

<http://ir.u-gakugei.ac.jp/>

Title	地名を読む(千倉とその周辺)
Author(s)	長瀬, 瑞己
Citation	研究紀要/東京学芸大学附属高等学校大泉校舎, 25: 89-92
Issue Date	2000-12
URL	http://hdl.handle.net/2309/10248
Publisher	
Rights	

地名を読む (千倉とその周辺)

長瀬 瑞己

前 言

一、引用の古地図・文献に付された略号は、以下の通り。

(内) … 国立公文書館・内閣文庫蔵

(千) … 千葉県立中央図書館蔵

(企) … 千葉県企画部「千葉県古文書目録2」

(叢) … 大正三年版「房総叢書」

(史) … 「千葉県史料 近世編 安房国 下」

二、出稿形態の制約上、字体を今日のものに改めたり、仮名書とした条がある。

現行の地図を見てまず気付くのは、河口の意の普通名詞が、川尻川・川口川のように河川名に転化していることである。これは入植者の多くが海からこの地に入り、しばらく漁労で生計を立てた後、陸地の開墾を進めていったことを暗示している。

また、中心街で南北の千倉が逆転している。この点については、古地図を参照するに、以下のような推論が浮かびあがる。

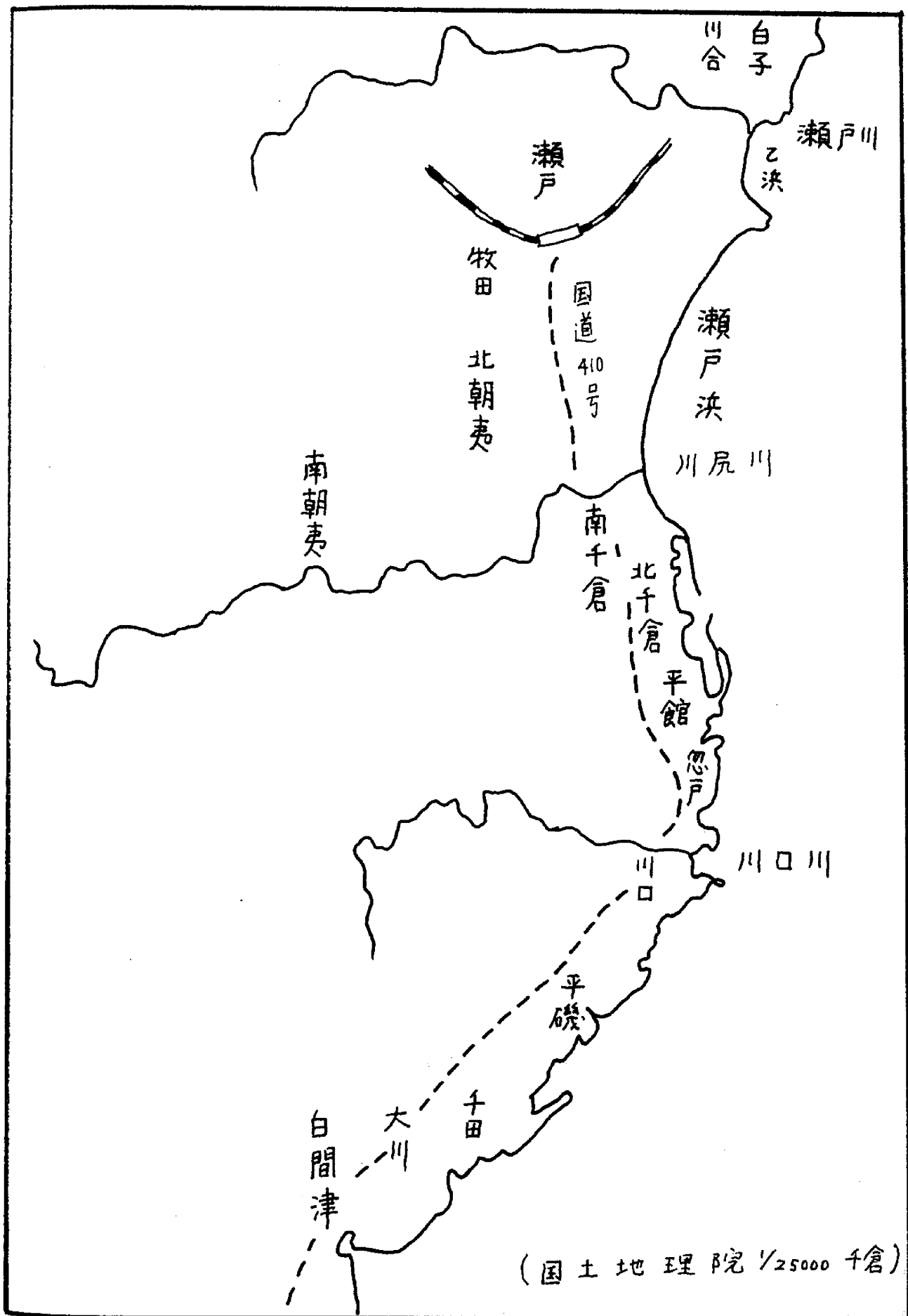
- 1、人口の中心は、もともと瀬戸浜の方に在った。
 - 2、川尻川の北を北朝夷、南を南朝夷と称した。
 - 3、磯に漁港が整備されてから、人口の中心は南へと移動した。
 - 4、漁港の北側を北千倉と呼ぶようになったが、南側は平館の地名が残った。
 - 5、南朝夷の中心街は千倉町の成立に伴って南千倉と呼ばれるようになった。
 - 6、南朝夷は、中心街を除く形で、地名として残った。
 - 7、北朝夷は、北千倉へと名称の転換ができなくなり、そのままの地名が残った。
- ここで不可思議なのは、千倉という名称が、町の成立以前には、行政上存在しなかったらしいということである。

推定正保年間 (一六四四〜四八) 『安房国知行高帳』 … (内)
 元禄十四年 (一七〇一) 『安房国郷帳』 … (内)
 享保十二年 (一七二七) 『安房国村助郷請帳』 … (企)
 推定元文年間 (一七三六〜四二) 『安房国村高帳』 … (企)
 文政十三年 (一八三〇) 『安房国四郡村村高御朱印付記録』 … (千)
 天保四年 (一八三三) 『天保郷帳』 … (内)
 天保十四年 (一八四三) 日野資愛『安房国志』 … (千)
 嘉永三年 (一八五〇) 鳥海醉車『房陽郡郷考』 … (内)

多少の村名の相違はあるものの、これら八点の中に、千倉村の名は見えない。いずれも朝夷郡内の六十余村について逐一の石高を記し、末尾にその合計が記されている。寺社領として認められた田畑(御朱印)については、記載されているものと無いものがある。千倉村の名称が見えるのは、筆者の知るかぎりでは、次の古文書一点のみである。

入会漁之儀に付波太村名主浦請人一札 … 『山口もん家文書』 (史)
 …… 主文・差出人署名押印、省略 ……
 千田村 名主 藤右衛門 殿
 平磯村 同 源左右衛門 殿
 川口村 同 文右衛門 殿
 忽戸村 同 次郎右衛門 殿
 平館村 同 彦左右衛門 殿
 千倉村 同 清右衛門 殿

これは寛文十三年(一六七三)に出状されているが、ここに言う千倉村とは、南朝夷両村の通称であって、行政上の正式な名称とは、思われぬ。



(国土地理院 1/25000 千倉)

三

白子 川合 セト 北朝夷 南アサ イナ へタテ 忽戸 川口 平ソイ 千田 大川 白マツ 乙ハマ 白ハマ

新築

瀬戸川
川尻川
千倉浦
川口川

北朝夷
南朝夷
千倉
平館

『安房國全圖』(内)
嘉永二年刊 (1849)

『房陽郡郷考』(内)
嘉永三年刊 (1850)

そもそも、陸地に千倉の名が出現するのは、古地図では、幕末の、しかも簡略なものに限る。上の里程標はその一例であるが、『房陽郡郷考』のように石高帳まで付した詳細なものには、千倉は見えない。ごく一般的な地図になると、平館と南朝夷との間に記されている。

千倉の名が冠せられるのは、もっぱら海の方で、上の地図に記された千倉浦というのが、その好例である。このことについては、わかりやすい文献史料がある。安永九年四月(一七八〇)に、中国船が外房沖を漂流、それを地元漁民が救助した事件があり、多様な記録が残っている。次は、その内の二件の表題である。

安房国朝夷郡千倉浦漂着南京船一件留書 …… (内)
房州千倉海江南京舟漂着之記 …… (内)

前者は公文書であって、大名の知行ごとに計二十一ヶ村が報告者となっている。それを順に記せば、以下の通りである。

白浜、白間津、大河、大貫、乙浜、川戸、千田、川口、忽戸、平館、南朝夷、北朝夷、下瀬戸、上瀬戸、白子、安馬谷、杉田、久保、川井、峯、宇田、平磯、瀬戸。(瀬戸ニヶ集落は、合わせて一ヶ村とする)
つまり、千倉浦や千倉海はあるが、千倉村は無いのである。

伊能忠敬の『沿海測量日記』の享和元年(一八〇一)七月七日の条にも、以下のように記されている。

六ツ半後、瀧口村出立。朝夷郡白浜村・乙浜村・白間津村・大川村・千田村・平磯村・川口村・忽戸村・平館村・南朝夷村、北朝夷村八ツ後二着。名主十左衛門。海辺二南千倉浦・北千倉浦あり。南北朝夷村之内。夜、晴天。測量。

更に、房総の地誌として定評のある中村國香『房総志料』を継承した田九健良『房総志料続編』(天保四年刊：一八三三)には、次のような条がみえる。

朝夷郡朝夷村あり。北朝夷、南朝夷二村あり。此所の浦を千倉といふ。其南を忽戸といふ。忽戸の鼻は東南へ出て、上総市ヶ坂より見ゆるなり。其西を平館といふ。 …… (養)

こうして史料群を眺めてみると、千倉の名称は、あるいは海から来ているのかもしれないという思いにとらわれる。クラが断崖絶壁や大岩の意である事は、地形地名の研究で知られる松尾俊郎氏や松永美吉氏の挙げておられる幾多の例を見ても動かぬ事実と考えられるからである。実際、忽戸から千潮時の海を眺めると、砂利の中から岩盤が層を成して斜めにせり出しており、特異な光景である。古文

献や古地図に見える千倉浦というのは、瀬戸浜の方だが、ここはここでやはり岩があるのである。既掲の中国船難破の報告書には、次のように記されている。

次第に大風雨・高波にて海上ことのほか荒れ強くござさうろつところ、八ツ時(午前二時)頃にあいなり、(南京船が)千倉浦方へ乗り込みさうろつ様子に付き、陸の方へは岩根も多くこれある片浜の荒磯故、…(中略)…同日七時半時(午前五時)頃、千倉浦より半道程沖の方にあい当たる所にて川戸山と唱へさうろつ大岩海中にこれあり。大岩へ唐船乗り上げ…

このあと、この中国船は、勇み肌の漁師たちが海に跳び込み、座礁した大岩から外されて、無事、浜へ引き上げられている。

はたして千倉は、海中の岩を言ったものだろうか。実は、にわかに断定し難い。『房総志料統編』には、次のような記述もみえる。

七浦に接せる古渡津千倉という浜有り。此の地石花菜を産す。奥地の海買(商人)多く載せ去り、里正殿制ありて、定日の外猥りにとらしめずと。

ここにはじめて千倉浜という名称があらわれる。しかもその浜は古くは船着き場だったというのである。そして、テングサの漁場でもある。

この一節は、角川の地名大辞典に付されている小字一覧とも符合するように思われる。南北両朝夷の二つの大字の中に、小字としての千倉がそれぞれ一個所ずつ見える。とすれば、川尻川河口付近の両岸が「古渡津」なのかもしれない。海産物の納屋が並んでいたとしたら、美称として字義通りの千倉なのかもしれない。

最後に、「忽戸の鼻」の語からも、また下の地図からも、同地が突出した岩礁地帯として意識されていたことは確かである。但し、コツの語義は確定し難い。瀬戸・川戸と同じ命名法で、古い地名かもしれない。戸は処で、川戸とは、琉球方言で、川・泉・井…いずれも「カー」であるように、水場の意であろう。

平館は、中世地名ではない。県教委編『千葉県所在中世近世城館跡詳細分布調査報告書Ⅱ旧上総・安房地域』を見ても、居館跡は発見されていない。隣の平群がいろいろんだ低山帯を示す有名な古語で、用字法も同じことからすると、あるいは「隔て」で、古代の郡界であったとも憶測される。

